

2024年度
年次報告書



和歌山大学

国際観光学研究センター

CENTER
FOR
TOURISM
RESEARCH

Contents

1.	国際観光学研究センター(CTR)について	2
1.1.	ミッション	2
1.2.	ビジョン	2
1.3.	研究推進におけるキーワード	2
1.4.	目標	2
1.5.	Tourism & SDGs	2
1.6.	組織体制	3
1.6.1.	組織図	3
1.6.2.	運営機関	3
1.6.3.	CTR研究員	4
1.6.4.	CTR研究ユニット	10
1.7.	活動内容	11
1.7.1.	研究活動	11
1.7.2.	研究・教育サポート	11
1.7.3.	広報、アウトリーチ、アドボカシー	11
2.	活動報告	12
2.1.	研究活動	12
2.1.1.	主な研究プロジェクト	12
2.1.2.	出版	22
2.1.3.	短期研究員招へい制度	25
2.1.4.	イベントの企画・運営	26
2.2.	研究・教育サポート	27
2.2.1.	研究力養成支援	27
2.2.2.	イベント開催支援	28
2.2.3.	観光学部等授業科目の開講支援	29
2.2.4.	受託事業「JICA課題別研修」実施	30
2.2.5.	海外研究教育機関との連携	31
2.3.	広報、アウトリーチ、アドボカシー	32
2.3.1.	学会スポンサー参加	32
2.3.2.	イベント開催協力	32
2.3.3.	学会、イベント参加	33
2.3.4.	運営・企画イベント一覧	33

1. 国際観光学研究センター(CTR)について

1.1. ミッション

観光学研究の高度化を通じて、
健全で持続可能な社会の発展に寄与する。

1.2. ビジョン

倫理と責任ある観光発展に重きを置く、
アジア太平洋地域を牽引する研究機関を
確立する。

1.3. 研究推進におけるキーワード

- Ethics and Responsibility
- Diversity and Equity
- Community and Environment

1.4. 目標

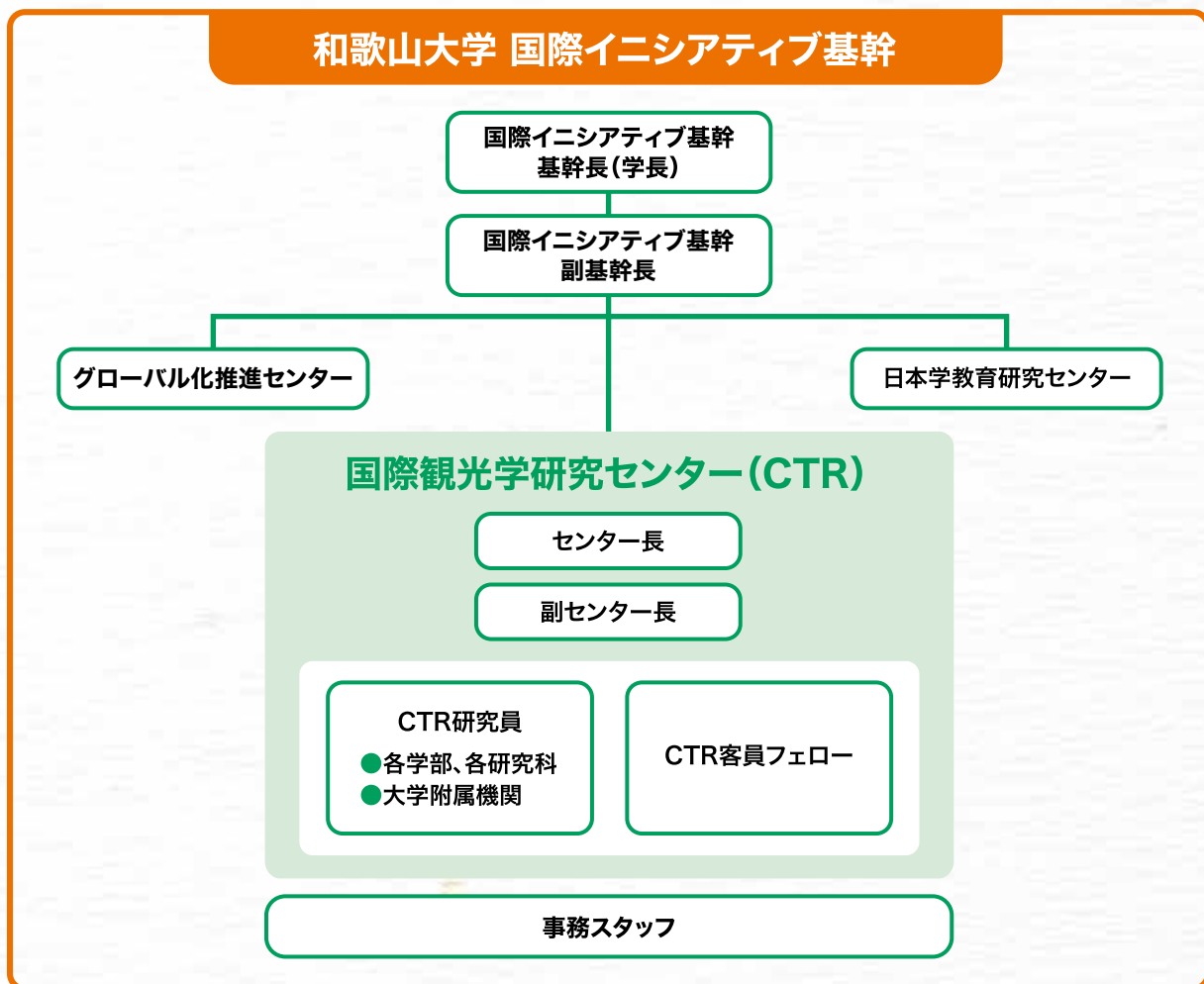
- 国内外の観光におけるステークホルダーとの連携強化
- サステナビリティを支援する研究活動を通じた、
倫理的かつ責任ある観光活動の促進
- 学内外における活発な研究文化の醸成
- 観光教育の支援
- 大学内のグローバル化に貢献

1.5. Tourism & SDGs

国連の掲げる「持続可能な開発目標 (SDGs)」
の達成に観光を通じて貢献していく。

1.6. 組織体制

1.6.1. 組織図



2025年3月現在

1.6.2. 運営機関

国際イニシアティブ基幹 推進会議	全学のグローバル化推進を踏まえた戦略方針・ 企画の立案・管理。
CTR 運営委員会	日常的な意思決定及び、事業計画管理・評価。

1.6.3. CTR研究員

CTR研究員 (計40名)	和歌山大学客員教授	4名
	CTR専任研究員	2名
	CTR併任研究員	観光学部24名、学内他学部等10名
CTR客員フェロー (計75名)	CTR名誉フェロー	2名
	CTR客員フェロー	61名
	CTR客員ジュニアフェロー	12名

研究員一覧

1.6.3.1 CTR研究員

2025年3月現在

<和歌山大学客員教授>

CHEER, Joseph M.	和歌山大学 客員教授、Professor, Western Sydney University (Australia)
MILLER, Graham	和歌山大学 客員教授、Professor, NOVA School of Business and Economics (Portugal)
RITCHIE, Brent W.	和歌山大学 客員教授、Professor, The University of Queensland (Australia)
SHARPLEY, Richard	和歌山大学 客員教授、Emeritus Professor, University of Central Lancashire (UK)

<CTR専任研究員>

ELBARBARY, Mohamed	国際観光学研究センター 講師
山北 隆太郎	国際観光学研究センター 助教

＜CTR併任研究員＞

CHAKRABORTY, Abhik	観光学部 准教授
DOERING, Adam	観光学部 教授
ZAINAL ABIDIN, Husna	観光学部 准教授
秋山 演亮	イノベーションイニシアティブ基幹 教授、学長補佐
足立 基浩	経済学部 教授、副学長
井伊 博行	システム工学部 教授
上野 美咲	経済学部 准教授
遠藤 理一	観光学部 講師
大浦 由美	観光学部長、教授
香月 義之	観光学研究科（専門職学位課程）教授
加藤 久美	観光学部 教授
木川 剛志	観光学部 教授
岸上 光克	経済学部 教授、学長補佐、食農総合研究教育センター センター長
北村 元成	観光学部 教授
木村 ともえ	観光学研究科（専門職学位課程）准教授
佐々木 啓	観光学部 助教
佐々木 壮太郎	観光学部 教授
佐藤 祐介	教育機構 教養教育部門 講師
佐野 楓	国際観光学研究センター 副センター長、観光学部 准教授
柴本 百合香	観光学部 特任助教
竹田 明弘	社会インフォマティクス学環 教授
竹林 明	観光学部 教授
竹林 浩志	観光学部 教授
辻本 勝久	経済学部 教授
出口 竜也	観光学部 教授
富田 晃彦	教育学部 教職大学院 教授
永瀬 節治	観光学部 准教授
東 悦子	国際観光学研究センター センター長、観光学部 教授
堀田 祐三子	観光学部 教授
松田 敏幸	観光学研究科（専門職学位課程）特任教授
八島 雄士	観光学部 教授
山岸 大二郎	観光学部 特任助教
吉田 道代	観光学部 教授
吉野 孝	システム工学部 教授

1.6.3.2 CTR客員フェロー

敬称略(2025年3月現在)

<CTR名誉フェロー>

CTR名誉フェローは、観光学の発展・確立に向けた包括性・普遍性の高い研究課題を有し、その裏付けとなる優れた研究実績を有する研究員をいう。

大橋 昭一	和歌山大学 名誉教授
山田 良治	和歌山大学 名誉教授

<CTR客員フェロー>

CTR 客員フェローは、国内外の大学教員または一定の研究経験を有するものとし、CTR 研究員との共同研究を行うもの、CTR での研究プロジェクトへ参加するものとする。

COMERIO, Niccolò	Research Fellow, School of Economics and Management, LIUC Università Cattaneo (Italy)
DRUMMOND, Damon	Graduate Researcher, Flinders University (Australia) / Adjunct Lecturer, Keio University (Japan)
LEE, Seul Ki	Associate Professor, Sejong University (South Korea)
PEREIRA-DOEL, Pablo	Lecturer; Digital Lab Commercialisation Officer; ESRC-SeNSS Research Fellow; Sustainability Fellow, Institute for Sustainability, University of Surrey (UK)
PHAM, Linh L D	Lecturer, Hospitality and Tourism, Hanoi University (Vietnam)
SCARLES, Caroline	Professor, Technology in Society, Brunel Business School; Visiting Professor, University of Surrey (UK)
THAM, Aaron	Lecturer in Tourism, Leisure and Events Management, University of the Sunshine Coast (Australia)
TING, Hiram	Professor, i-CATS University College (Malaysia)
TUOMI, Aarni	Senior Lecturer, Haaga-Helia University of Applied Sciences (Finland)
ZAINAL ABIDIN, Nurdiyana	Senior Lecturer, Department of Architecture, Faculty of Built Environment, Universiti Malaya (Malaysia)
石川 肇	京都日本文化資源研究所 所長
磯田 悠	和歌山県庁

井出吉 成佳	広島市立大学 国際学部国際学科 准教授
伊藤 央二	中京大学 スポーツ科学部 教授
今井 裕子	コムサポートオフィス 代表
岩橋 克彦	紀美野町役場（和歌山県）
上原 史子	岩手県立大学 講師
大井 達雄	立正大学 データサイエンス学部 教授
大野 一	国土交通省 観光庁 旅行振興参事官付
岡田 美奈子	追手門学院大学 地域創造学部地域創造学科 教授
小川 勝久	大阪芸術大学 写真学科 客員教授
小川 雅則	和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 客員教授
小原 満春	沖縄国際大学 産業情報学部 准教授
神野 真一	ソーシャルイノベーターラボ 所長
唐崎 翔太	島旅農園「ほとり」経営
神田 孝治	立命館大学 文学部 教授
金 宰煜	広島大学大学院 人間社会科学研究科人文社会科学専攻 講師
金 明柱	同志社女子大学 助教
権 純珍	無所属（元・倉敷芸術科学大学 危機管理学部 教授）
間中 光	追手門学院大学 地域創造学部 講師
小柴 恵一	株式会社 G1 company 代表取締役
斎藤 望	富山福祉短期大学 国際観光学科 教授、 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 博士後期課程
坂西 明子	立命館大学 政策科学部 教授
坂元 英俊	一般社団法人地域観光研究所 代表理事

笹森 琴絵	酪農学園大学 特任准教授、海洋生物調査員
佐野 宏樹	立命館大学 経営学部 准教授
澤端 智良	茨城キリスト教大学 経営学部経営学科 准教授
淑瑠 ラフマン	金沢大学 先端科学・地域共創推進機構 特任助教
蘇 哲仁	Distinguished Research Professor, Department of Restaurant, Hotel and Institutional Management, Fu Jen Catholic University (Taiwan)
杉山 幹夫	株式会社宝水ワイナリー 取締役
宋 謙	九州共立大学 経済学部 准教授
田中 光敏	大阪芸術大学 映像学科 教授、映画監督、CMディレクター、クリエイターズユニオン 代表取締役
曹 禎敏	ユタカ交通株式会社
豊島 茂	九州産業大学 地域共創学部 非常勤講師
永井 隼人	立命館大学大学院 経営管理研究科 准教授
永田 修一	関西学院大学 商学部 准教授
長野 史尚	九州医療スポーツ専門学校 教育職員
中村 仁	跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授
夏目 千恵子	松蔭大学 観光メディア文化学部 講師
南條 青志	紀の川市役所
藤原 久嗣	広島経済大学 准教授
堀込 孝二	大阪国際大学 人間科学部スポーツ行動学科 講師、特定非営利活動法人スポーツファンデーション 代表理事
牧野 恵美	立命館アジア太平洋大学 国際経営学部 准教授
宮口 直人	株式会社ビズユナイテッド 代表取締役
森 清顕	清水寺 執事 教務部長
森田 由樹子	株式会社エコロの森 代表取締役

築田 香織	白鷗大学 経営学部 専任講師
山本 訓弘	株式会社 MydoMind Ltd. 代表取締役
米田 晶	四天王寺大学 文学部国際コミュニケーション学科 講師
吉田 秀政	公益財団法人とやま観光推進機構 観光地域づくりマネジャー兼マーケティング部長
李 只香	九州共立大学 経済学部 教授

<CTR客員ジュニアフェロー>

CTR 客員ジュニアフェローは、原則として、国内外の大学院修士課程及び博士課程在籍中の学生もしくは、修士課程修了後、CTR 研究員との共同研究やCTR での研究プロジェクトへ参加するものとする。修士課程及び博士課程在籍中の学生については、在籍大学の指導教員の許可を受ける必要がある。なお、当該研究により単位を付与することはない。

IBRAGIMOVA, Shokhsanam Zokirjon Kizi	和歌山大学大学院観光学研究科 博士前期課程
KAFUKESE, Christina Joy	和歌山大学大学院観光学研究科 博士前期課程
NGOC, Le Bao	和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
ZAINAL ABIDIN, Nabilah	PhD Researcher, Universiti Teknologi Malaysia (Malaysia)
明山 文代	和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
小島 宏毅	和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
澤田 幸輝	沖縄女子短期大学 総合ビジネス学科 助教、 和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
孫 昊	和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
橘 昌尚	和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程
中村 勇太郎	愛知淑徳大学 情報教育センター 助教
花井 佑果	和歌山大学大学院観光学研究科 博士前期課程
平井 千恵	一般社団法人市駅グリーングリーンプロジェクト 理事

1.6.4 CTR研究ユニット

CTRでは3つの研究ユニットを組織しており、共同研究や研究会等の活動は「経営 / Management」「地域 / Community」「文化・遺産 / Culture & Heritage」の各ユニットを軸に行っている。なお、CTR研究員(客員フェローを除く)はいずれかのユニットに所属し、研究プロジェクトは複数のユニットにまたがることもある。



経営 | Managementユニット

概要	観光・ホスピタリティ産業及び観光地の経営戦略、マーケティング、リスクマネジメント、イノベーションを主な研究分野とする。研究活動を通じて政策立案及び戦略の策定に貢献し、観光地及び観光・ホスピタリティ産業の持続可能な競争優位の構築を目指す。
メンバー	Niccolò Comerio、Shokhsanam Zokirjon Kizi Ibragimova、Christina Joy Kafukese、Pablo Pereira-Doel、Linh L D Pham、Brent W. Ritchie、Caroline Scarles、Aaron Tham、Aarni Tuomi、Husna Zainal Abidin、足立 基浩、伊藤 央二、上野 美咲、上原 史子、神野 真一、金 宰煜、権 純珍、間中 光、佐々木 壮太郎、佐野 楓、杉山 幹夫、蘇 哲仁、孫 昊、竹田 明弘、竹林 明、竹林 浩志、辻本 勝久、出口 竜也、永井 隼人、長野 史尚、中村 仁、夏目 千恵子、堀込 孝二、牧野 恵美、宮口 直人、八島 雄士、山岸 大二郎、山北 隆太郎、山本 訓弘、李 只香

地域 | Communityユニット

概要	地域貢献型地方国立大学である和歌山大学にとって、地域社会は切り離せない観光研究の場である。地域社会や地域経済との関わりという観点から観光現象を把握し、「まちづくり」や「地域活性化」といったアプローチで観光開発に関する調査・研究を行う。
メンバー	Abhik Chakraborty、Joseph M. Cheer、Adam Doering、Graham Miller、秋山 演亮、井伊 博行、石川 肇、大浦 由美、小川 勝久、小川 雅則、香月 義之、岸上 光克、小柴 恵一、斎藤 望、坂元 英俊、佐々木 啓、佐藤 祐介、永瀬 節治、堀田 祐三子、松田 敏幸、吉野 孝

文化・遺産 | Culture & Heritageユニット

概要	観光現象を文化論的な観点から探求していく他、文化遺産のマネジメントや保全及び開発に関する広い課題について、クリエイティブツーリズムなどの新しいアプローチも取り入れる。歴史的・建造環境や都市、農村や農業景観、自然環境、特徴ある文化が存続する地域及び無形遺産の保全や再生なども課題とする。
メンバー	Mohamed Elbarbary、Richard Sharpley、Nabilah Zainal Abidin、Nurdiyana Zainal Abidin、遠藤 理一、加藤 久美、神田 孝治、木川 剛志、北村 元成、木村 ともえ、柴本 百合香、田中 光敏、富田 晃彦、東 悦子、森 清顕、吉田 道代

1.7. 活動内容

1.7.1. 研究活動

●研究プロジェクト

- ◆科学研究費助成事業採択研究課題
- ◆CTR 研究員向け共同研究支援プログラム

●短期研究員招へい制度

●イベント企画・運営

- ◆「2024 年度 CTR リサーチフォーラム」
- ◆「CTR International Symposium Series 2024-2025」

●論文集「Wakayama Tourism Review」出版

1.7.2. 研究・教育サポート

●研究プロジェクト助成

- ◆CTR 研究員向け共同研究支援プログラム

●研究力養成支援

- ◆大学院生および若手研究者向けワークショップ実施

●研究環境整備

- ◆主要図書（電子ジャーナル含む）整備
- ◆研究成果公開促進インセンティブ制度

●研究関連情報提供

●イベント開催支援

●観光学部授業科目の開講支援

●受託事業「JICA課題別研修」実施

●海外研究教育機関との連携拡充

●外部機関との連携促進

1.7.3. 広報、アウトリーチ、アドボカシー

●学会スポンサー参加

- ◆APTA Annual Conference 2024

●外部機関との連携促進

- ◆観光庁主催「UN Tourism 活用検討会」参加
- ◆「CTR International Symposium Series 2024-2025」開催

- イベント開催協力
- 学会・イベント参加(研究発表、モデレーター、オブザーバー等)
- セミナー等のイベント企画・運営

2. 活動報告

2.1. 研究活動

2.1.1. 主な研究プロジェクト

2.1.1.1. 科学研究費助成事業採択研究課題

文部科学省及び日本学術振興会が交付する科学研究費助成事業に採択され、CTR 研究員が代表者として取り組む研究プロジェクトは以下の通り。

研究種別	代表者	研究課題	研究分野
基盤研究B	加藤 久美	リジェネラティブ論に基づくデスティネーション・ウェルビーイング評価モデル構築と実践	観光学
基盤研究C	Adam Doering	Life, leisure and tourism in the wake of disaster: Investigating the role of surf tourism for post-tsunami coastal recovery	観光学
	Joseph M. Cheer	Post-Pandemic Rural Revitalization: Culture and Tourism for Recovery, Resilience and Regeneration	観光学
	大浦 由美	観光地域マネジメント推進体制における森林空間利用の進展と課題	観光学
	富田 晃彦	天文を得意としない教師の授業運営改善とその国際的応用性の研究	科学教育
	堀田 祐三子	観光の社会的意義を問う一労働の変化と余暇・観光の階層性からのアプローチ	観光学
	吉田 道代	沖縄の若年労働市場におけるインバウンド観光の影響	人文地理学
若手研究	Husna Zainal Abidin	Muslim-friendly tourism as a pathway for tourism recovery in Japan, post COVID19	観光学
挑戦的研究(萌芽)	遠藤 理一	観光が浮かび上がらせる移動のポリティクス・クリティカル・ツーリズムの視点から	社会学およびその関連分野
研究活動スタート支援	山北 隆太郎	組織変革論に基づく定期開催イベントの持続可能性に関する研究	経済学、経営学およびその関連分野

2.1.1.2. CTR助成研究プロジェクト

CTR共同研究支援プログラム

CTR共同研究支援プログラムとは、CTRミッション「観光学研究の高度化を通じて健全で持続可能な社会の発展に寄与する」を踏まえ、優先目標（「倫理と責任ある観光発展に重きを置く、アジア太平洋地域を牽引する研究機関を確立する」）を考慮した研究プロジェクトを推進し、観光学研究の高度化・国際化を図ることを目的に、研究費助成を行うものである。本プログラムはCTR内部の競争的資金の位置づけで、下記のCTRの研究重点分野のいずれか及び下記のキーワードのいずれかに貢献する内容であることを求める。

●研究の重点分野

- ①ディスティネーション・マネジメント
- ②観光教育

●研究推進にあたるキーワード

Ethics, Responsibility, Diversity, Equity, Community, Environment

2024年度に採択された7件のプロジェクト課題、概要および活動報告、実績は以下の通り。

なおCTRウェブサイトにも掲載している。

(<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/research/projects/ctrjrsupport/2024/index.html>)。

プロジェクト課題

レゴのシリアスプレイと GenAI を活用し、
観光分野における望ましい気候シナリオの視点を探る

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

Husna Zainal Abidin＊、Aarni Tuomi

●概要

観光産業が直面する気候危機を克服する上で、特に持続可能な観光地の開発を通じて、地元のステークホルダーが果たす役割は大きい。にもかかわらず、政府や政策立案者は、政策立案において地元の主要なステークホルダーを軽視しがちである。この研究では、観光地ホストの視点に焦点を当て、彼らが観光地の将来の持続可能な発展についてどのように考えているかに焦点を当てている。独自に、この研究では、アートとテクノロジーを組み合わせ、気候変動に関連する将来のビジョンを伝える芸術的介入を行い、最終的に行動変容を呼び起こすことを目指す。さらに、フィンランドと日本の地元ホストの視点を調査することで、国を超えた比較も探求する。このプロジェクトでは、望ましい未来というアプローチを採用し、参加者と質的な共創ワークショップを開催し、未来の気候変動へのビジョンを掘り起こす。具体的には、フィンランドと日本の観光開発における重要な戦略的優先事項である、地方の観光地の持続可能な活性化に焦点を当てる。生成的AIシステム（DALL-E）のような技術的ソフトウェアは、持続可能な観光地開発を取り巻く魅力的な議論を喚起するために使用される。この研究は時宜を得たものであり、持続可能な観光地と気候危機の領域において、理論と実践の両面で貢献するものである。

●活動報告・実績

Peer reviewed journals

- ・Tuomi, A., and Zainal Abidin, H. (Under review). Host Perspectives on Preferable Tourism Futures: Insights from Finland and Japan. *Journal of Tourism Futures*.
- ・Zainal Abidin, H. and Tuomi, A (accepted for publication). Exploring preferable climate futures. *Wakayama Tourism Review*, 6.

Conference proceedings

- ・Tuomi, A., Zainal Abidin, H., Tuominen, P., Ascencao, M. (2025). Convincingness of AI-generated Restaurant Reviews. In: Nixon, L., Tuomi, A., & O'Connor, P. (eds) *Information and Communication Technologies in Tourism 2025*. ENTER 2025. Springer Proceedings in Business and Economics. Springer, Cham. eBook ISBN 978-3-031-83705-0

Conference presentations and participation

- ・Tuomi, A., & Zainal Abidin, H. (2025, February 17-19). Using LEGO Serious Play to explore Host Perspectives on Preferable Tourism Futures [poster presentation]. 32nd ENTER Tourism Conference, Wroclaw, Poland.
- ・Tuomi, A., Zainal Abidin, H., Tuominen, P., Ascencao, M. (2025, February 17-19). Convincingness of AI-generated Restaurant Reviews [conference presentation]. 32nd ENTER Tourism Conference, Wroclaw, Poland
- ・Zainal Abidin, H., Tuomi, A., & Ab Rahman, N.A.F.W. (2025, January 13-15). Exploring Older Adults' Views of Future Sustainable Destination Development. 4th ATLAS-Critical Tourism Studies Asia Pacific Conference, Hainan, China.
- ・Zainal Abidin, H., Rahman, A., & Tuomi, A. (2024, September 14-16). Exploring Preferable Climate Futures for Tourism Development: A Local Host Perspective from Japan and Malaysia [Poster presentation]. Malaysia-Japan Visionaries Conference (MJVC) 2024, Tokyo, Japan.

プロジェクト課題

観光映像の定性的定量的分析手法の確立と “長期的”観光戦略のあり方の研究

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

木川 剛志＊、Husna Zainal Abidin、香月 義之、加藤 久美、
神田 孝治、小柴 恵一、蘇 哲仁、森 清顕

●概要

観光映像は、観光地域の観光戦略を具現化したものであり、この分析によって観光地域にどのような観光現象があり、その対策としての観光戦略までを読解することができる。しかし、国際的な学会においても、「観光」と「映像」に関連した研究はFilm Tourism やFilm induced Tourism であり、映画やTV 番組によって観光地がどのように注目されているか、観光現象の分析に留まる。本研究では、未だ進まない観光映像の研究を実務的な見地の分析を加えて、社会に応用可能な研究成果を目指し、学術的論考によって進めるものである。

●活動報告

本研究において特筆すべき成果のひとつは、2024 年6 月に日本における映像祭の草分け的存在である「Short Shorts Film Festival & Asia」が運営するBranded Shorts に、研究代表者が専門家として招聘されたことである。これにより、日本における観光映像の専門家として広く知られる契機となった。この登壇は、2025 年2 月に収録され、同年4 月に放映予定の東京キー局によるテレビ出演へとつながった。

また、2025 年3 月には岡山県真庭市にて第7 回日本国際観光映像祭を開催し、観光映像やサステナブル・ツーリズムをテーマとした多数のシンポジウムを実施した。さらに学術的な発表としては、立命館アジア太平洋大学で開催されたSEAMA2025 において、「The Diverse Roles of Tourism Film」と題する研究発表を、アブストラクト査読を経て実施している。

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

佐野 楓＊、Hiram Ting

●概要

観光産業は、マレーシアと日本において最も急速に成長している経済活動の一つである。観光産業の持続可能な発展を評価するスケールは既存研究に多く取り上げられているが、持続可能性は文脈の違いによる価値観の違いと意味の曖昧さを依然として含んでいるため、地域コミュニティの持続可能な発展は責任あるマネジメントの視点を通して理解する必要がある。従って、本プロジェクトは責任ある観光マネジメントにおける指標をさらに探求し、地域コミュニティの持続可能な発展に影響を与える指標の内的関連性を、巨視的かつ微視的な側面から検証するものである。

●活動報告・実績

本プロジェクトは責任ある観光発展と持続可能な観光発展について、クチン市（マレーシア）と白浜町（日本）でそれぞれ10名ずつ半構造化インタビューを行った。具体的に、以下の質問項目に基づき、回答者に責任ある観光に対する理解を尋ねた。

1. 責任ある観光 (Responsible Tourism) と持続可能な観光 (Sustainable Tourism) の違いはあると思いますか？
○もし「ある」と答えた場合、観光における「責任」と「持続可能性」をどのように理解しているかを尋ねます。
○もし「ない」と答えた場合、責任ある観光と持続可能な観光が同じだと考える理由を尋ねます。
2. 白浜町の観光を発展させるためには、どのようなステークホルダーが関与すべきだと思いますか？（その理由も含めて）
旅行者と地域の関係⇒旅行者は、地域のターゲットではない
○この質問を通じて、参加者が地域社会の役割をどのように理解しているかを知りたいと考えています。
○ここでの地域社会は「ターゲット」ではなく「パートナー」として扱われるべきです。（特に旅行者）
3. 各ステークホルダーはどのような役割を担うべきだと思いますか？
○「責任 (Responsible)」を語る際に、まず「誰が (WHO)」を明確にする必要があるため、この質問をします。誰がどんな責任を果たすのか？
○また、責任ある観光では「旅行」は「目的」ではなく「行動・振る舞い」として捉えられるため、旅行中に果たすべき責任についても尋ねます。
4. あなたの経験をもとに、人と白浜町のより良い未来のために責任ある観光地や観光ビジネスをどのように発展させることができるでしょうか？（トリプル・ボトム・ラインの観点から）
○この質問では、異なるステークホルダーがどのように協力できるかを探ります。
○具体的には、信頼性 (reliability)、優先順位 (priority)、目的地の状況 (situation of destination) などについて考察します。
5. 責任ある観光の実践について、あなたの経験や具体例を共有していただけますか？
○参加者に、責任ある観光の実践に関する自身のエピソードを共有してもらいます。
○そのエピソードは、ポジティブなものでもネガティブなものでも構いません。

また、持続可能な観光について、以下の質問を行った。

1. 観光客の行動や意識が地域社会にどのような影響を与えていると感じますか？
⇒ 観光客が地域の文化や環境を尊重しているかどうか。
⇒ 地域の過密化、騒音、文化の商業化に対する対策。
2. 地域の観光業が、地元住民にどのような恩恵をもたらしていますか？ 観光に関連する活動が、地域社会に対する社会的な格差を広げる可能性がありますか？
⇒ 雇用創出や、地域コミュニティへの利益還元。
⇒ 観光業による富の偏在や、地元住民が観光地として感じる疎外感など。
3. 地域の観光産業が持続可能な経済成長にどのように寄与していると感じますか？
⇒ 長期的な収入源の確保や、地元の中小企業の活性化。
4. 観光業の発展によって、地域経済の多様化が進んでいますか？ 観光業に依存しすぎることで、地域経済にどのようなリスクが生じる可能性があると思いますか？
⇒ 観光以外の産業との連携や、経済の一極集中を避けるための取り組み。
⇒ 経済の脆弱性、シーズンリティ (季節変動) による収入の変動。
5. 地域の観光業が、自然環境や生態系にどのような影響を与えていると感じますか？
⇒ ポジティブな影響 (保護活動支援など) とネガティブな影響 (環境負荷や生態系の乱れなど)。

現在、インタビュー調査の結果を分析し、2025年度に International Journal of Tourism Research, Journal of Sustainable Tourism への投稿を準備している。

プロジェクト課題

ピレネー山村地域と繋がる：
価値教育の手法を用いた観光実践教育プログラムの開発

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

柴本 百合香＊、吉田 道代

●概要

価値教育とは幅広い意味を含むが、一般には市民性や多文化教育、自律的な価値判断を育成する教育という意味で使われることが多い。ここでは、サステナブルツーリズムを実現するのに必要な「価値」を醸成するような教育という意味で用いている。本研究は、まずサステナブルツーリズムの実現に必要な価値とはどういったものかを学術的に検討する。さらに、こうしたサステナブルツーリズムの実現をめざすピレネー山脈と北スペインを専門とする旅行会社およびピレネー山脈麓の村の自治体と協働し、価値を重視した実践的な観光教育プログラムの開発を行う。

●活動報告・実績

本プロジェクトでは「価値観に基づく学び」を重視した実践的な観光教育プログラムを開発した。本プログラムの対象は、日本で観光学を学ぶ大学生であり、プログラムの実施場所として、グリーンツーリズムやルーラルツーリズムが普及している北スペイン・ピレネー山脈地域を選定した。

プロジェクトの第1フェーズでは、北海道大学で開催された価値観に基づく学習に関するワークショップへの参与観察や、Johan Edelman 教授らをはじめとする複数の観光学研究者・実務者への聞き取り調査を通じて、変容的アプローチを本プロジェクトの背景理論として採用した。変容的アプローチは、価値を複数の種類に分類し、教員と学生が共に考えながら価値や価値観を具体的に理解することを促すプロセスである。これにより、学生は批判的な自己省察に深く関与し、倫理観や価値観を自覚し、最終的に世界観の変化へとつながる。本プロセスは、将来の観光専門家となる学生たちの内面的な意識と倫理的自覚を育み、サステナブルツーリズムのさらなる実現可能性へとつながる。プログラムの実践的な枠組みは、Teaching Tourism: Innovative, Values-Based Learning Experiences for Transformative Practices (Edelman et al., 2022) で紹介されている学習アクティビティや、Arcodia & Dickson (2021) の事例を参考に、作成した。

第2フェーズでは、前述の枠組みに基づき、プログラムの活動内容と訪問先の策定・精査を行った。スペイン・中央ピレネー山脈地域に位置するアラゴン州ウエスカ県を訪問し、現地コミュニティの人々への聞き取り調査を実施するとともに、現地視察と観察を行った。北スペインを専門とする現地旅行会社の代表 Maria Susin Cirac 氏及びコーディネーター兼スペイン政府公認ガイドの細川桜氏の協力のもと、その土地ならではの文化や活動をプログラムに組み込むことで、新たな視点が得られるよう設計した。また、それに伴い、事前・事後の学習内容や活動についても検討・策定した。

本プロジェクトの成果として、上記の通り開発したプログラムに6名の観光学部生が参加を希望し、2024年10月から事前研修を開始、2025年3月14日～25日にスペインを訪問した。

【発表・報告・掲載】

第一に、北海道大学で開催された価値観に基づく学習に関するワークショップにおいて参与観察と聞き取り調査を実施し、その結果を基にフィールドノートを執筆し、Wakayama Tourism Review に投稿した。次に、プログラムの開発段階から現在に至るまでに得られたデータとその分析結果をまとめ、今後の研究の方向性とともに、日本観光ホスピタリティ教育学会第24回全国大会(大阪府茨木市開催)の英語セッションにおいて発表した。この研究成果は学会要旨集に掲載され、英語セッションでも発表を行った。

掲載 Publication:

Shibamoto, Y. (in press). A reflective journey through Teaching Tourism: Values-based education for transformative learning. Wakayama Tourism Review, 6, (pp.33-35). Wakayama University Association for Tourism Studies. Center for Tourism Research, Wakayama University.

Shibamoto, Y. (2025). Exploring Values-based Tourism Education Through an International Field Trip. the 24th Annual Conference Proceedings, Japanese Society for Tourism and Hospitality Educators - JSTHE.

学会発表 Conference Presentation:

Yurika Shibamoto: "Exploring Values-based Tourism Education Through an International Field Trip" the 24th Annual Conference of Japanese Society for Tourism and Hospitality Educators - JSTHE, 2025.3.8 (Ibaraki, Osaka, Japan)

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

出口 竜也＊、米田 晶、森田 由樹子

●概要

東西南北に広がる国土を有する日本は、地域固有の気候、風土、産物という面において多様性を有しており、そこで暮らす人々は、長い年月をかけ、より望ましい生活のために工夫された生活文化を醸成してきたと理解することができる（石川2000）。このうち、いわゆる食文化に目を転じると、調理や賞味の過程で発酵調味料が多用されることに特徴があるといわれている（大久保2017）。たとえば、大豆・米・麦などを発酵させたつくられた味噌・醤油や、発酵飲料である酒をさらに発酵させた酢やみりん、さらに地域によっては魚を発酵させた魚醬などが使用され、多様な食文化が伝承されている。本研究は、ユネスコ無形文化遺産に登録された和食文化に注目し、それらを観光資源としたフードツーリズムの視点から検討を加えるものである。とりわけ発酵調味料に焦点を当て、発酵調味料と食文化、およびその地域性との関連について調査するとともに、地域観光への活用の可能性について経営人類学的に考察することを目的とする。

●活動報告・実績

本プロジェクトでは、秋田県湯沢市、新潟県長岡市、富山県全域、そして和歌山県全域を対象として、味噌醤油醸造蔵をめぐる、各地の気候、風土がどのような地域性を形成し、どのような食文化をもたらしているのかを探ることを目的としていたが、調査を進める中で「発酵」をテーマとした宿泊施設が沖縄本島と鹿児島県の霧島地域に存在することを知り、これらの事例も射程に含めるかたちで調査を進めた。

まず、最初に訪れた新潟県長岡市で訪問した味噌星六では、越後味噌（米味噌）と麦味噌を醸造していた。原材料は契約農家が無農薬で生産したもの、水は山に汲みに行くこともあるが大半は水道水をろ過したものを使用していることがわかった。塩は天然塩を使用するなど、地球に負荷をかけないものづくりを実践していた。味噌星六の味噌は、味噌汁でおいしく食べられる味噌として販売している。その他、野菜の味噌漬（例：長岡巾着ナス、大根、きゅうりなどの味噌漬）や、銀鱈の味噌漬など、加工食品も製造・販売していた。

秋田県湯沢市で訪問したヤマモ味噌醤油醸造元、石孫本店では、秋田味噌（米味噌）と醤油を醸造していた。秋田味噌は、米麴を多めに使った甘味の強い味噌で、塩分濃度は11％程度であった。両店ともに、秋田県産の原材料にこだわり、厳しい寒さから建物の中に醸造蔵をつくる内蔵（うちぐら）が特徴的であった。石孫本店では、秋田杉の木桶を使い、秋田県男鹿半島の塩を使ったオール秋田県産の特別な味噌も作られていた。味噌については、味噌汁として食べることを想定して作られているものの、石孫本店ではラーメンを土曜日のみ提供していたほか、ヤマモ味噌醸造元では、蔵つき酵母を調理に使ったメニューを開発し、カフェ→レストラン→オーベルジュを併設するなど、2次産業から3次産業への産業構造の高度化も確認された。また、石孫本店では、地場産野菜を使った味噌漬の製造・販売も行っていた。

富山県で訪問した、石黒種麴店、杉野味噌醤油株式会社、新村こうじ味噌商店ではいずれも越中味噌（米味噌）を醸造しており、「水分多く、塩分高く、麴歩合高く、そして2年、3年をかけてじっくりと発酵熟成させた味噌」（山元醸造株式会社 HP より）が特徴であることがわかった。また、富山市から射水市にかけての地域の祭りでみられるこんにゃくを使った「あんばやし」、呉西地域でみられる野菜の「よごし」（味噌を煎り付けた料理）、筍の味噌煮、朝日町の「みそかんぱ」（ご飯をすりつぶして小判型に成形し割りばしに刺して焼く料理）など、味噌を使った当地に独特の料理も多く確認できた。味噌加工品としては、豚肉、ぶりなどの鮮魚、野菜、豆腐の味噌漬などが多く出回っており、行事食としては、11月の報恩講で見られる「いとこ煮」や、サトイモの田楽などがある。ゆず味噌、ごま味噌、甘味噌など、煮たり焼いたりした野菜に塗って食べる加工味噌の種類も多く見られた。醤油については、組合で作られた生揚げ醤油にアミノ酸液を加えて作られる甘い醤油が富山県から石川県にかけて多く見られた。

新潟県長岡市、秋田県湯沢市、そして富山県全域の味噌・醤油醸造蔵の特徴とまとめると、次の通りである。

- ・味噌：米麴を使った米味噌で、米どころであったことから麴歩合は多めであった
- ・醤油：新潟県、秋田県のいずれも木桶で醸造した醤油が主流であったが、富山県では生揚げ醤油にアミノ酸液を加えた甘い醤油の種類が多く見られた。

他方、和歌山県で訪問した味噌・醤油醸造蔵においては、日本海側とは様相の異なる多様な製品が確認された。味噌の種類は、米味噌であるが、白みそ、金山寺味噌が作られる割合が高いのが特徴的であった。白みそは、紀南から紀中、紀北にかけて販売量が多くなっていた。紀南（田辺市）の小山安吉醸造元では年末年始に集中して白みそを製造・販売していたが、紀中（湯浅町、御坊市）および紀北（和歌山市）の味噌店では、通年で販売していた。白みその用途は、雑煮だけでなく、日常的に飲む味噌汁、野菜のぬたや和え物として利用するほか、和菓子の白あんにも使うなど、幅広い用途が見られた。和歌山県内で製造・販売されている白みそは優しい甘味が特徴的だが、甘味の強い京都の白みそとは別物の味わいである。白みそについては、地域によって作り方も味わいも多様で、今後も調査の必要があると考える。県内では赤みそを製造販売していたのは御坊市の天田屋のみであった。金山寺味噌は歴史的背景を反映して、湯浅町の製造業者が多いものの、県内の多くの味噌蔵で製造販売されていた。金山寺味噌は日本全国の産直販売店で販売されているものの、和歌山県内の味噌醸造蔵での製造割合が4割～9割と圧倒的に多いことから、和歌山県での消費量が他府県より多くなっていることが確認できた。これは、鎌倉時代の1249（建長元）年に当時の宋（現在の中国）に渡った法燈国師が「径山寺味噌」を日本に持ち帰り製法を伝え、由良の興国寺で作り始めたことに由来しており、江戸時代に紀州藩が推進したブランディング政策の影響が強いことも指摘されている（李,2021）。しかし、和歌山県内での金山寺味噌の流通量の多さは、食文化との影響も大きい。特に、江戸時代に米の少なさを補おうと工夫された茶粥文化と金山寺味噌との相性がよいことから、金山寺味噌が今日でも消費者に根強く支持され、他府県より消費量が多い結果となったとみられる。

本プロジェクトの調査結果から、新潟県長岡市、秋田県湯沢市、富山県全域、そして和歌山県全域にある味噌醤油醸造蔵で製造されている味噌は、各地域の食材を使い、各地域の食材による料理に合った味わいのものとなって現代に継承される多様性が見られるとともに、各地域の郷土料理の味を決める基盤となる調味料として機能し、世界無形文化遺産に登録された「和食；日本人の伝統的な食文化」の地域性を生み出す固有性が確認できた。

また、高付加価値型のフード（ガストロノミー）ツーリズムを実現させるための有力なコンテンツの実態としては、秋田県湯沢市のヤマモ味噌醸造元で進められている蔵つき酵母を使った独自の調理法への発展の事例を挙げることができる。世界レストランベスト50で1位を5回獲得したコペンハーゲンにあったレストランNoma（2024年末で閉店）は、独自の発酵技術を使って食材の熟成やソースを開発し、ここにしかない味を創り出していたが、ヤマモ味噌醸造元ではコハク酸を産生する蔵つき酵母を使ってここにしかない味を創り出すというNomaと同様の方法を用いて、秋田県湯沢市の食文化を背景に高付加価値型のフード（ガストロノミー）ツーリズムを実現させていた。また、秋田県では、食のあきた推進課であきた発酵ツーリズムを推進しているほか、湯沢市岩崎地区で取り組まれている「岩崎発酵するするまちづくり協議会」では農泊のコンテンツの一つとして醸造蔵が機能し、高単価のツアープログラムを実現していることも確認できた。

この湯沢市における農泊プログラムをヒントに発酵を宿泊に活用した事例を探したところ、冒頭で記した沖縄県と鹿児島県で先行事例があることを新たに知り、今後の研究の可能性を広げるべく、現地調査を実施した。

沖縄県中城村にある「EM ウェルネス 暮らしの発酵ライフスタイルリゾート」では、土地改良、水環境の改善、悪臭の消臭、家庭内の清掃などに有用な微生物群（Effective Microorganisms）を取り入れた暮らしを提案する拠点となるホテルで、インバウンド観光客が約4割（台湾、韓国ほか）、残り6割は沖縄県民を中心とした国内利用とのことであった。ホテル内では、主に地域住民を対象とした発酵調味料（味噌、酢、みりん、塩麴、生揚げ醤油など）づくりの体験プログラム、暮らしに活かせるEM講座（家庭菜園、洗濯・掃除など）など、生活に密着したプログラムを実施していた。しかし、ホテルのレストランで提供されている食事は、沖縄伝統の食文化というよりは、本土の料理が多く並ぶbuffet形式であっただけでなく、売店で販売されていたものは、福井県産の塩麴や長野県産の味噌調味料など、沖縄県外の生産者のものが並んでいた。おそらく、地元住民のニーズを反映したものであろうが、沖縄県内には、米麴を使った米味噌が伝統的に作られていることから、このような伝統的な沖縄の食文化を味わうことができると感じる調査となった。

次に、鹿児島県霧島市にある「麴・発酵ホテル」を調査した。このホテルは、焼酎の教科書を作った河内源一郎氏が創業した種麴店「河内源一郎商店」が経営している。河内源一郎商店は、味噌や醤油で使われる黄麴だけでなく、黒麴、白麴も扱っており、現在は発酵が活発に進む黒麴の研究と、黒麴を使用した商品開発を熱心に進めている。また、河内源一郎商店は「麴ソムリエ」資格の監修も行っており、資格取得者の「麴を自分の手で作りたい」というニーズに応えるため（製麴3日と言われ、宿泊を伴う作業であるため）の宿泊施設として当該ホテルを開業したことがわかった（副支配人へのインタビューによる）。インバウンド観光客のニーズも一定数あり、今後の展開に期待がもたれる。世界的に手間暇をかけて食品を保存し、付加価値および栄養価を高める「発酵」に対する注目が集まっている現在、高付加価値型のフード（ガストロノミー）ツーリズムの実現に、「発酵」が貢献することは大きいと考える。本プロジェクトで調査した内容はその一端に過ぎず、今後も先行地域および先行事例を吟味し、高付加価値型コンテンツの実態について研究を進めたい。

古くて新しい観光案内 -
吉田初三郎が描いた鳥瞰図による観光教育と観光への誘い

東 悦子*、Mohamed Elbarbary、石川 肇、山北 隆太郎

インターネットであらゆる観光の情報が入手可能な時代である一方、さまざまな観光パンフレットが多数発行されている。そのようななか、吉田初三郎の鳥瞰図を活用することの意味は、大正・昭和の観光ブームの観光地と現在の観光地を比較し、時間軸で観光地の変化を見て取ることが可能となる点にある。その点を活用し、本研究では、(3) 学生や生徒達の地域教育、歴史教育、環境教育にも活かす方法を検討し提案する。(4) また同パンフレットは情報を得るための手段としてだけでなく、アートとしての側面から、旅行後も観光者のもとに旅の思い出とともに保存されることを期待し、初三郎鳥瞰図のアート性についてもパンフレット制作のベースとして研究する。

(4) 「パンフレットは情報を得るための手段としてだけでなく、アートとしての側面から、旅行後も観光者のもとに旅の思い出とともに保存されることを期待し、初三郎鳥瞰図のアート性についてもパンフレット制作のベースとして研究する」に対して、Mohamed 氏および山北氏が担当する授業を中心に配布した際の学生の反応を振り返ると、第一に、留学生から色やデザインに対する感嘆の表現が寄せられた。また、一般の日本人からの意見として、パンフレットが「日本的」であることへの高い評価と素晴らしい記念品・贈答品として利用できるというフィードバックが得られた。今後の課題として、紙面が限られるため、いかに必要な観光情報を効率的に提供できるかを検討する必要がある。

プロジェクト課題

日本における歩く観光の研究（歩く観光 1.0）： 責任醸成、地域連携、環境配慮

●プロジェクトメンバー（＊は代表者）

八島 雄士＊、金 宰煜、豊島 茂、永井 隼人

●概要

世界人口の定常化を背景に、SDGs の次には、ウェルビーイングが重要なキーワードとなる。歩くことによって幸せを感じることは、福祉、医療、健康など、さまざまな分野で取り上げられている。特に、朝に散歩することにより、セロトニン神経を活性化することで、ストレスを受け流し、脳の疲労を回復できるとの指摘もある。本研究は、日本において歩く観光の開発を体系的に整理する一環として、中山間エリアと都市エリアとを比較する形でそれぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、第一に、九州オルレについて、イベント参加者への継続的なアンケート調査を実施する。また、コース開発の源である済州オルレ団体に聞き取り調査を実施する。第二に、都市エリアでは、ウォーカブルなエリア開発の現状について行政担当者にインタビューし、現場を視察する。第三に、調査結果を相互に比較し、中山間エリア及び都市エリアのそれぞれの特徴（責任醸成、地域連携、環境配慮）を抽出する。この結果を学会や論文で公開し、ブラッシュアップしたのち、さらに大型の研究費に応募する。

●活動報告・実績

- [1] 宋謙・八島雄士（2024）.「ウォーカブルなまちづくりの持続可能性：魅力的なまち歩きコース開発の試案」『調査月報』2024年5月号．九州経済調査協会．
- [2] 宋謙・八島雄士．「ウォーカブルなまちづくりの持続可能性：魅力的なまち歩きコース開発の試案」．BIZCOLI TALK【特集】ウォーカブルなまちづくり．2024年5月14日．九州経済調査協会．
- [3] 八島雄士・豊島茂・金宰ウク．「取り組みの創意工夫が歩く人の興味・関心に及ぼす影響－九州オルレを事例に－」．余暇ツーリズム学会2024年度全国大会自由論題報告，2024.09.08，亜細亜大学
- [4] 八島雄士．「歩くことに興味を引くための創意工夫－持続可能性を視座に－」．広島市立大学国際学部・国際学研究科特別コキアム，2024.12.5，広島市立大学サテライトキャンパス．
- [5] 八島雄士・豊島茂・金宰ウク（2025）.「歩く人の興味・関心に及ぼす取り組みの創意工夫－九州オルレ・コース運営の実態調査から－」．『観光学』34．（投稿予定）
- [6] 宋謙・八島雄士．「「歩く人」目線のウォーカブル統合事業計画策定に関する研究」．日本地域政策学会2025年度第24回全国研究【愛知・名古屋】大会，2025.6.28．中京大学名古屋キャンパス、（報告受理済み）
- [7] KIM, J., YASHIMA, Y., TOYOSHIMA, S., Walking tourism research in Japan (Walking tourism 1.0): Responsibility, community, environment. 2024年度CTRリサーチ・フォーラム．2024年11月15日．和歌山大学国際観光学研究センター．

そのほか、2025年3月9日（日）に開催された九州オルレウォーキングフェスティバル（みやま・清水山コース，福岡県みやま市）において、参加者アンケートの内容を実施主体の九州観光機構の九州オルレ担当者と検討し、一部を採用いただき、実施した。その結果及びその分析について、学会等で成果を報告または投稿する予定である。

また、2023年度CTR共同研究支援プログラム「サステナブル・ディスティネーション・マネジメントシステムを構築するためのメカニズムの探索：組織間連携の視座から」の成果、および、本研究支援プログラムの成果を含めて構成した研究計画（「歩く観光による幸せの効果測定の可能性：観光サービスの統合的なアプローチ」）が、令和7(2025)年度科学研究費基盤研究B（一般）に採択された。

2.1.2. 出版

2.1.2.1. 「Wakayama Tourism Review Vol.6」発刊

Wakayama Tourism Review (WTR) は、CTR研究員およびCTR客員フェローらによる研究論文や調査レポート等を収録したCTR発行の全英文のジャーナルである。年1回の発行で、今年度は計9本が収録された。オンライン版を一般公開しており、CTRウェブサイトから閲覧可能。

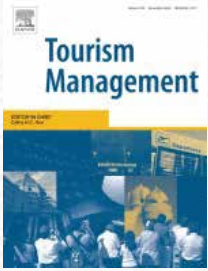
<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/resource/publications/WTR.html>



2.1.2.2. CTR研究員の主な出版業績一覧

CTR研究員の主な出版業績は以下の通り。なお、現学内研究員の業績詳細は、本学ウェブサイト内、研究者総覧ページ(<https://researchers.center.wakayama-u.ac.jp/search?m=home&l=ja>)参照。

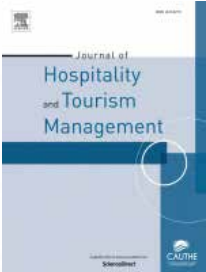
<研究論文>

出版年月	タイトル [] はジャーナル名／著書名、出版社名 ※は Scopus 収録ジャーナル、() 内は Scopus CiteScore 2023
	著者 * は CTR 研究員
2024年5月 	How the Metaverse can add new layers of hospitality services: A perspective of senior industry practitioners [International Journal of Contemporary Hospitality Management] ※ (16.9) Mark Ashton, School of Hospitality and Tourism Management, University of Surrey, Guildford, UK Viachaslau Filimonau, School of Hospitality and Tourism Management, University of Surrey, Guildford, UK Aarni Tuomi*, Hospitality Business, Haaga-Helia University of Applied Sciences, Helsinki, Finland and Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan
2024年6月 	Dressing up the place: Urban lifestyle mobilities and the production of “fashionable” tourism destinations in rural Japan [Tourism Management] ※ (24.1) Daijiro Yamagishi*, Support Office for Tourism Education and Practice, Faculty of Tourism, Wakayama University, Japan Adam Doering*, Faculty of Tourism, Wakayama University, Japan

出版年月	タイトル [] はジャーナル名／著書名、出版社名 ※は Scopus 収録ジャーナル、() 内は Scopus CiteScore 2023
	著者 * は CTR 研究員
2024年6月 	生涯スポーツ学の体系化を目指して：余暇・レジャー学における研究アプローチの類型からみた生涯スポーツ研究の動向 [生涯スポーツ学研究] 伊藤 央二* (中京大学スポーツ科学部、和歌山大学国際観光学研究センター)
2024年6月	コロナ禍におけるマラソンイベントのマネジメントー不確実性に直面した組織間プロジェクトの中心組織に対する社会構造の影響ー [子ども未来・スポーツ社会文化研究所] 山北 隆太郎* (和歌山大学・オタワ大学大学院) Milena M. Parent (University of Ottawa)
2024年10月 	Leveraging para-sport events for accessible tourism development in non-host cities: Tokyo 2020 Paralympic Games [International Journal of Event and Festival Management] ※ (3.8) Kosuke Takata, Institute of Sport Economics and Sport Management, German Sport University Cologne, Cologne, Germany Ryutaro Yamakita*, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan; School of Human Kinetics, University of Ottawa, Ottawa, Canada Masaki Aoyama, Faculty of Human and Social Sciences, University of Marketing and Distribution Sciences, Kobe, Japan
2024年10月 	Customized language models for tourism management: Implications and future research [Annals of Tourism Research] ※ (19.1) Aarni Tuomi*, Haaga-Helia University of Applied Sciences, Helsinki, Finland / Wakayama University, Wakayama, Japan Iis Tussyadiah, University of Surrey, Guildford, UK Mário Passos Ascensão, Haaga-Helia University of Applied Sciences, Helsinki, Finland

出版年月	タイトル □ はジャーナル名／著書名、出版社名 ※は Scopus 収録ジャーナル、() 内は Scopus CiteScore 2023
	著者 * は CTR 研究員
2024年12月 	Does understanding of pilgrimage routes elicit idealised emotional experiences through virtual reality walking? [Rural Society] ※ (1.7) Eiji Ito*, School of Health and Sport Sciences, Chukyo University, Toyota, Aichi, Japan Shintaro Kono, Faculty of Kinesiology, Sport, and Recreation, University of Alberta, Edmonton, Canada Kei Tanisho, Faculty of Health and Well-being, Kansai University, Sakai, Japan Tsukasa Kawanishi, Department of Sports and Health Sciences, Chubu Gakuin University, Seki, Japan
2025年1月 	How do international and domestic tourists perceive the service quality of Japanese ryokans? A cross-cultural perspective [Journal of Quality Assurance in Hospitality & Tourism] ※ (7.0) Fukumi Maki, Tourism Exchange Division, Wakayama Prefecture Administration, Wakayama City, Japan Kaede Sano*, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama City, Japan; Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama City, Japan Hao Sun*, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama City, Japan; Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama City, Japan
2025年2月 	Methodological advances and theoretical gaps in tracking non-urban tourism mobility [International Journal of Tourism Research] ※ (9.0) João Romão, Yasuda Women's University, Hiroshima, Japan Kaede Sano*, Wakayama University, Wakayama, Japan

＜書評＞

出版年月	タイトル [] はジャーナル名／著書名、出版社名 ※は Scopus 収録ジャーナル、() 内は Scopus CiteScore 2023
	著者 * は CTR 研究員
2024年12月 	Book Review – A Research Agenda for the Social Impacts of Tourism. [Journal of Hospitality and Tourism Management] ※ (13.3)
	Kaede Sano*, Faculty of Tourism, Wakayama University; Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama City, Japan

2.1.3. 短期研究員招へい制度

短期研究員招へい制度は、本学研究者との共同論文執筆、共同研究、外部資金獲得などの可能性の高い研究者を最大2週間程度招へいし、CTRを拠点としてさまざまな研究交流を通じて観光学研究の活性化、高度化を図ることを目的としている。2024年度はCTR研究員の推薦に基づき1名を受け入れし、ワークショップ等への登壇やCTR研究員・学生との交流を持った。

●Dr. Aarni Tuomi (Haaga-Helia University of Applied Sciences, Finland)

5月21日(火)～5月29日(水)に渡って来学し、CTRが実施するワークショップシリーズ2024 (27ページ参照)や観光学部のOpen Research Forumに登壇した他、本学学生への研究指導助言や教員との打ち合わせを行った。また今回の訪問時に実施したレゴ・シリアスプレイのワークショップの成果も含めた持続可能な観光開発に関して、本学研究員との論文執筆および学会発表が行われるほか、欧州でのより大きな共同研究を進める計画がなされており、今後長期的な共同研究の実施が期待される。



2.1.4. イベントの企画・運営

●「2024年度CTRリサーチフォーラム」開催

本フォーラムは、主にCTRが支援助成する共同研究支援プログラムの中間報告として実施するものであり、11月15日(金)に採択課題7件の中間報告が行われた。また、本学観光学研究科博士前期課程および後期課程の学生3名による研究発表も行った。今回もオンライン開催の形式を取り、客員フェローを含め学内に留まらないオープンな場の発表としており、国内外より研究者が参加した。本学客員教授であるJoseph M. Cheer教授(西シドニー大学)もオーストラリアから参加し、研究発表や報告に対する質疑およびコメントを残され、今後の研究活動への期待も述べられた。



●「CTR International Symposium Series 2024-2025」開催

CTRが2022年度より実施する国際シンポジウムシリーズを11月17日(日)、18日(月)の2日間にわたり和歌山県白浜町で開催した。シリーズ3回目となる今回は、総合テーマ「責任ある観光 Responsible Tourism」を掲げ、CTRが2本柱として掲げる「ディスティネーション・マネジメント」「観光教育」に関する基調講演や、高等教育機関および産業界の有識者らによる発表とパネルディスカッションが行われた。



1日目は、「持続可能な観光地マネジメント」のテーマのもと、基調講演にマレーシア・i-CATS大学のハイラム・ティン教授が登壇し、持続可能な観光地マネジメントにおいて地域社会・若者・旅行者・官民セクターの4つの関係の重要性と緊急性、連携の意義について自身の知見を教示した。また産業界と学術界の両視点から考える責任ある観光開発として、開催地の白浜町で観



光に携わる実務家や国内外の高等教育機関に所属する研究者が登壇し発表が行われた。観光事業や活動を通じ、それぞれの立場から見た責任ある観光開発とは何か、観光による負荷やキャパシティ、観光客と地域住民との関係性など、多角的な視点から議論が行われ、参加者からの質疑も受け付け活発な意見交換がなされた。

2日目は「観光教育と観光倫理」のテーマのもと、オーストラリア・クイーンズランド大学のリサ・ルハネン教授が基調講演講師として登壇し、少子高齢化などのさまざまな社会変化や課題がある中で、持続的で責任ある観光に資するための観光教育において、倫理的な姿勢とリーダーシップが必要であることや、未来の観光リーダー形成についてご自身の経験と幅広い知見をもとに示唆された。午後からは本学学生による観光地白浜町をテーマに学生視点から見る観

光地の展望について発表が行われ、パネリストとして登壇した観光教育に携わる教員や研究者から、多角的な視点から捉えて観光について考える意義などのコメントがなされた。またその後のパネルディスカッションにおいても、これから観光教育を受ける学生への期待や若い世代の観光における倫理観を如何に醸成していくか、その方法や手段、懸念について示唆される議論が展開され、有意義な討議の場となった。



2.2. 研究・教育サポート

2.2.1. 研究力養成支援

●大学院生および若手研究者向けワークショップ実施

博士課程に在籍する学生および若手研究者向けに、観光学研究における研究手法や調査方法等について実践的な情報や知見を講義形式で提供するワークショップを実施した。主にCTR研究員が講師を担当し、全3回のワークショップシリーズを開催、全3回に参加した視聴者に対し参加証明書(Certificate)を発行した。

●Session 1 「Introduction to Serious Play for Research & Teaching」

5月23日(木)にCTR客員フェローであり短期招へい研究員として来学したAarni Tuomi氏(フィンランド・ハーガヘリア応用科学大学)が講師を担当。多分野において使われている新しい研究手法としてのレゴ・シリアスプレイの概念や活用方法について紹介し、自身が行ったワークショップの事例を元にデータ収集の手法や活用制限についても情報提供を行った。



●Session 2 「Examining Tourist's Behaviour Using Statistical Analysis Techniques」

6月10日(月)にCTR専任研究員であるMohamed Elbarbary講師が担当。観光学および人文社会学の分野で用いるデータ分析や統計分析について、その使い方やアンケート調査における注意点などを紹介し、ソフトウェア WarpPLSの使ったデータ分析の実例を示した。



●Session 3 「Understanding Epistemology: A Guide to Justifying Research Methods and Ensuring Valid Knowledge」

7月10日(水)にCTR専任研究員である山北 隆太郎助教が担当。特定の研究方法を選択するにあたっての認識論への理解に関して、論文レビューを通じて哲学的立場の違いと適用の仕方について説明し、認識論も含め研究設計の一貫性がいかに大事かを示唆した。



2.2.2. イベント開催支援

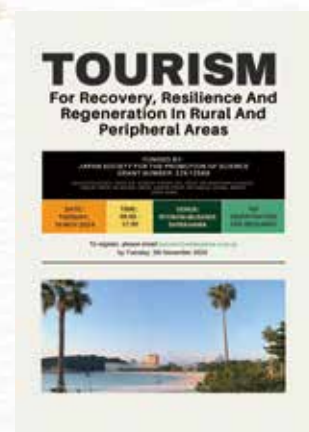
●ワークショップ「Journey to International Conferences」

2月7日(金)にCTR専任研究員であるMohamed Elbarbary講師と山北 隆太郎助教によるワークショップ「Journey to International Conferences」が開催された。国際学会への参加において、発表資料の構成やプレゼンテーションの仕方、また質疑応答の場面での心得など、これから学会参加をめざす学生や若手研究者に向けて情報提供を行った。ディスカッションの場も設けられ、より具体的な質問にも自身の経験を基に回答し事例を提示された。



●カンファレンス「Rural Tourism Conference in Shirahama」

CTR研究員であるジョセフ・チア客員教授(オーストラリア・西シドニー大学)が代表を務める科学研究費助成事業22K12588の一環として、「地域における復興・回復・再生のための観光」をテーマとしたカンファレンスが11月19日(火)に紀州・白浜温泉むさしで開催された。CTRも後援として参加し、国内外の20名以上の研究者による発表が行われ、地域やその周辺における観光の役割や開発としての観光について知見が共有された。



●第7回日本国際観光映像祭

2019年よりCTR研究員の木川 剛志教授(観光学部)がディレクターを務め、CTRも共催として参加する「日本国際観光映像祭」が、3月18日(火)～19日(水)に岡山県真庭市の旧遷喬尋常小学校およびエスパスホールにおいて開催された。



7回目を迎えた本年は、国内部門138本、国際部門1,132本の観光映像の応募があり、映像作品の表彰や

ART & Factory Japanのコンペティション等の多彩なプログラムで会場より国内外へライブ配信もされた。また本年のテーマは「森と人々、美しき暮らしの継承へ」とし、コロナ禍後の世界で観光が再び拡大する今、地域文化を発展させるための観光との適切な関係についてなど、各セッションにおいて議論が交わされた。

2.2.3. 観光学部等授業科目の開講支援

CTR専任研究員が、観光学部及び観光学研究科の一部科目の開講を支援した。観光学部科目に関して一部はグローバル・プログラム(Global Program/GP)対象科目であり、2024年度開講科目は下記の通り。

観光学部科目名	担当者
Global Tourism	Mohamed Elbarbary
Event Management	山北 隆太郎
レジャー論 (t)	山北 隆太郎

観光学研究科科目名	担当者
Tourism Policy and Planning (M)	Mohamed Elbarbary

2.2.4. 受託事業「JICA課題別研修」実施

「JICA課題別研修」とは、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施する事業の一つで、日本側が研修内容を企画・計画し開発途上国に提案し研修員を募集するものである。CTRでは2023年からJICA関西より委託を受け、課題別研修「中央アジア地域広域観光開発政策」を実施している。

本研修は、中央アジア5カ国(カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン)における広域観光開発を進めていく体制づくりを目的とし、各国より行政や民間の観光従事者が研修員として参加し、日本の観光に関する取り組みや日本版DMOの仕組み、また和歌山県や熊野古道の観光誘致戦略や文化・歴史遺産の保全、人材育成に焦点を当てた講義やフィールドワーク、グループワークを行うものである。



2年目となった2024年度も、8月20日より4日間実施した遠隔研修(オンライン研修)と9月11日～10月1日までの現地研修(来日研修)を行った。現地研修では、観光庁やUN Tourismアジア太平洋地域事務所、近畿運輸局、また本学教員による講義を行った。世界の観光状況や日本版DMO、関西を中心とした連携についてなど、研修員は講師

の話に耳を傾けた。その後田辺市熊野ツーリズムビューロー協力の元、田辺市熊野ツーリズムビューローや熊野古道、白浜空港等を訪問しフィールドワークを行った。フィールドワークでは観光従事者による講義を受けた他、熊野古道では道普請を行い保全活動にも参加するなど、さまざまな角度から観光地経営や連携、DMOについて学ぶ機会を得た。また、東京ビッグサイトで開催されたツーリズムEXPOジャパンにも参加し、日本や世界各国の展示ブースを訪れ、観光促進のブランディングやプロモーション方法を体験した。日本の旅行会社3社との面談も実施され、中央アジアの観光に関する課題など積極的な意見交換が行われた。

講義とフィールドワークで得た知見をもとに、研修員が自国の観光における強みや弱みを分析・討議し、最終日には各国毎にアクションプランや施策提案について発表した。前年度に引き続き、各国のインフラ整備やアクセス面での課題が挙げられたが、オンラインプラットフォームの設置といった5カ国が連携する取り組み案が提示され、5カ国が連携した広域観光開発に向けてのつながりが一層強くなったと言える。2025年度の最終年度に向けて、中央アジアの広域地域観光連携の一助となるよう引き続き取り組んで行きたい。



2.2.5. 海外研究教育機関との連携

●ウズベキスタン国内大学への訪問

12月4日～11日にかけて、東悦子CTRセンター長(観光学部)、佐野楓CTR副センター長(観光学部)、香月義之教授(観光学研究科専門職学位課程)および中元一恵特命国際コーディネーターがウズベキスタンへ渡航、ブハラ・サマルカンド・タシケントにある大学および研究機関を訪問した。



ブハラ国立大学では学長や副学長、観光学部教員と面談し、今後の研究交流や学生交流についての意見交換を行った。2018年に開設されたブハラ国立大学・和歌山大学観光教育センター (BSU-Wakayama Center of Tourism Education and Research) も訪れ、今後の活用方法についても協議した。また、本学と大学間交流協定を結ぶサマルカンドのシルクロード国際観光文化遺産大学を訪れ、副学長をはじめ、観光学部や外国語学部の教員と面談し、今後の共同研究の可能性について意見交換を行った。タシケントでは、ウズベキスタン共和国観光庁長官を表敬訪問し、ウズベキスタンの観光推進の状況について説明を受け、JICA課題別研修(30ページ参照)に研修員として参加していた観光庁職員とも面会し、帰国後の様子を伺うことができた。

CTRでは、2017年度よりウズベキスタン共和国の研究教育機関との連携を進めており、現在本学では、ウズベキスタン国内の8大学と大学間交流協定および4大学と学生交流協定を締結している。今後も共同研究や学生交流の機会を拡大できるよう連携を進めていく。

●オーストラリア国内大学への訪問

3月24日～28日にかけて、東悦子CTRセンター長(観光学部)、木川剛志教授(観光学部)および中元一恵特命国際コーディネーターがオーストラリアへ渡航、クイーンズランド大学およびカーティン大学を訪問した。



クイーンズランド大学では、客員教授であるBrent W. Ritchie教授と面会し、本学教員との共著論文執筆や共同研究など、今後も本学での継続的な研究活動について打ち合わせを行った。また国際担当の方と面会し、学生の短期交流の可能性も含め討議を行った。カーティン大学では、今後の研究交流、学生交流の可能性に係る打ち合わせを行った。学部やセンターの相互理解のためにプレゼンテーションを行い、情報交換や今後の連携の可能性について討議なされた。カーティン大学には日本語教育の授業が開講されているため、本学日本学教育研究センターとの連携も含め、さまざまな可能性についても模索され、今後も積極的に関係構築を進めていくことが話された。

2.3. 広報、アウトリーチ、アドボカシー

2.3.1. 学会スポンサー参加

●APTA Annual Conference 2024

7月3日～5日にわたり、Asia Pacific Tourism Association(APTA)の年次大会がマカオで開催された。APTAは1995年に創設された国際学会で、有力学術雑誌Asia Pacific Journal of Tourism Researchを発行する等、アジア太平洋地域で最も活発な観光研究の国際学会の1つと言える。本学からはCTR研究員である佐野 楓准教授、Husna Zainal Abidin准教授らが参加し研究発表を行った。またCTRは2015年よりスポンサーとしてAPTAの年次大会に協賛しており、会場内バナーへのロゴ掲載、ウェブサイトや学会プログラムに広告が掲載された。会期中にはスポンサーデスクも設置され、CTR専任研究員が訪れた国内外の研究者に向けて本学やCTRの広報活動を行った。



2.3.2. イベント開催協力

●2024年度短期交流学生受入プログラムに協力

日本学教育研究センターが行う2024年度短期交流学生受入プログラムにおいて、協定校であるオーストラリア・カーティン大学の学生15名が11月11日(月)に来学し、CTR専任研究員のMohamed Elbarbary講師および山北 隆太郎助教が本学学生との交流授業に実施協力した。本学学生はElbarbary講師や山北助教の助言のもと、日本文化やマナーについて、クイズを交えたプレゼンテーションなどで発表を行い、また折り紙や浴衣の着付け体験などさまざまな方法で交流を行った。



●日本学教育研究センター実施の「ウィンタープログラム」に協力

日本学教育研究センターが大学間交流協定を結ぶ大学の学生を対象として実施した「ウィンタープログラム」において、CTR専任研究員のMohamed Elbarbary講師が講義を行った。Elbarbary講師はプログラム2日目の2月18日(火)に「Tourism in Wakayama – From the lens of a foreign resident」のタイトルで和歌山の観光地や魅力について外国人教員という立場からの視点で紹介され、モデレーターを務めた山北 隆太郎助教とともに学生からの質疑応答にも対応した。



2.3.3. 学会、イベント参加

CTRスタッフが出席したイベントは以下の通り。なお、CTR研究員が研究発表等で参加した主な学会およびイベントは、CTRウェブサイト内、お知らせ記事を参照。

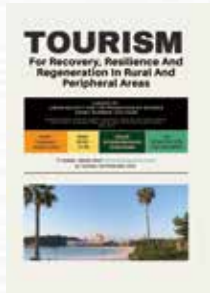
<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news-category/notice/>

日程	イベント名	主催
7月3日～5日	Asia Pacific Tourism Association Annual Conference 2024 スポンサーシップ参加（中国・マカオ）	Asia Pacific Tourism Association (APTA)
9月26日～27日	ツーリズムEXPO ジャパン参加（東京）	公益社団法人 日本観光振興協会、一般社団法人 日本旅行業協会（JATA）、日本政府観光局（JNTO）
3月21日	第25回UN Tourism 活用検討会出席（東京・オンライン）	観光庁

2.3.4. 運営・企画イベント一覧

開催日	イベント名称 / 講師等	ポスター
5/23(木)	CTR workshop series for students and young researchers 2024 Session 1 「Introduction to Serious Play for Research & Teaching」 スピーカー： Aarni Tuomi（ハーガヘリア応用科学大学 上級講師/和歌山大学国際観光学研究センター 客員フェロー） モデレーター： Husna Zainal Abidin（和歌山大学観光学部 准教授）	
6/10(月)	CTR workshop series for students and young researchers 2024 Session 2 「Examining Tourist's Behaviour Using Statistical Analysis Techniques」 スピーカー： Mohamed Elbarbary（和歌山大学国際観光学研究センター 講師） モデレーター： 山北 隆太郎（和歌山大学国際観光学研究センター 助教）	

開催日	イベント名称 / 講師等	ポスター
7/10(水)	CTR workshop series for students and young researchers 2024 Session 3 「Understanding Epistemology: A Guide to Justifying Research Methods and Ensuring Valid Knowledge」 スピーカー： 山北 隆太郎(和歌山大学国際観光学研究センター 助教) モデレーター： Mohamed Elbarbary(和歌山大学国際観光学研究センター 講師)	
11/15(金)	2024年度 CTRリサーチ・フォーラム 登壇者： ・佐野 楓(和歌山大学国際観光学研究センター 副センター長/観光学部 准教授) ・Husna Zainal Abidin(和歌山大学観光学部 准教授) ・出口 竜也(和歌山大学観光学部 教授) ・八島 雄士(和歌山大学観光学部 教授) ・金 宰煜(広島大学大学院人間社会科学研究科人文社会科学専攻 講師/和歌山大学国際観光学研究センター 客員フェロー) ・豊島 茂(九州産業大学地域共創学部 非常勤講師/和歌山大学国際観光学研究センター 客員フェロー) ・柴本 百合香(和歌山大学観光学部 特任助教) ・木川 剛志(和歌山大学観光学部 教授) ・東 悦子(和歌山大学国際観光学研究センター センター長/観光学部 教授) モデレーター： ・遠藤 理一(和歌山大学観光学部 講師) ・Mohamed Elbarbary(和歌山大学国際観光学研究センター 講師) ・山北 隆太郎(和歌山大学国際観光学研究センター 助教)	

開催日	イベント名称 / 講師等	ポスター
11/17(日) 18(月)	CTR国際シンポジウムシリーズ2024-2025 「責任ある観光」 基調講演: ・Hiram Ting(マレーシア・i-CATS大学 教授/和歌山大学 国際観光学研究センター 客員フェロー) ・Lisa Ruhanen(オーストラリア・クイーンズランド大学 教授) 話題提供者: ・藤田 正夫(一般社団法人南紀白浜観光協会 会長) ・中尾 建子(株式会社アワーズ取締役(SDGs担当)白浜事業所長、アドベンチャーワールド副園長、獣医師・学芸員) ・森重 良太(株式会社南紀白浜エアポート誘客・地域活性化室 室長) ・沼田 弘美(紀州・白浜温泉むさし 女将) ・Joseph M. Cheer(オーストラリア・ウエスタンシドニー大学 教授/和歌山大学 客員教授) ・Seul Ki Lee(韓国・世宗大学 教授) ・若林 直樹(京都大学経営管理大学院 教授) ・齋藤 望(富山福祉短期大学 教授) ・牧 一郎(九州産業大学 教授) ・堀田 祐三子(和歌山大学観光学部 教授) ・西澤 優季(和歌山県立神島高等学校 教諭) モデレーター: ・東 悦子(和歌山大学国際観光学研究センター センター長/観光学部 教授) ・佐野 楓(和歌山大学国際観光学研究センター 副センター長/観光学部 准教授) ・Husna Zainal Abidin(和歌山大学観光学部 准教授)	
11/19(火)	Rural Tourism Conference in Shirahama 基調講演: ・東 悦子(和歌山大学 教授) ・伊藤 央二(中京大学 教授) ・Honggang Xu(中国・中山大学 教授)	

開催日	イベント名称 / 講師等	ポスター
2/7(金)	CTR workshop 「Journey to International Conferences」 パネリスト： ・Mohamed Elbarbary (和歌山大学国際観光学研究センター 講師) ・山北 隆太郎 (和歌山大学国際観光学研究センター 助教) モデレーター： 東 悦子 (和歌山大学国際観光学研究センター センター長/ 観光学部 教授)	
3/18(火) 19(水)	「第7回 日本国際観光映像祭」 スピーカー： ・木川 剛志 (日本国際観光映像祭ディレクター/ 和歌山大学観光学部 教授) ・福島 真希 (日本国際観光映像祭審査委員長 (日本部門)/ 映像ディレクター) ・Kyung Wook Seo (日本国際観光映像祭審査委員長 (国際部門) / Associate Professor, Northumbria university, UK) ・松崎 まこと (映画活動家/ 放送作家) ・宮田 耕輔 (月刊ウララ元編集長/Flismo 株式会社代表取締役) ・加藤 久美 (和歌山大学観光学部 教授) 他	



CENTER FOR TOURISM RESEARCH

R

SM
RCH

【発行】和歌山大学国際観光学研究センター
〒640-8510 和歌山市栄谷930
TEL.073-457-7025
<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/>

【発行日】2025年10月



Wakayama University
Center for Tourism Research

2024年度 年次報告書
和歌山大学 国際観光学研究センター